

小集団活動でのコミュニケーション支援

わんぱくステーション

保育士 A

保育士 B

1.はじめに

今年度、わんぱくステーションでは、利用登録者13名（小学部4名、中学部6名、高等部3名）の受け入れを行っている。障害種別は問わずに受け入れの募集を続けているが、13名中10名が自閉症児であり、発達障害児の利用ニーズが高い状態が続いている。平成17年に「発達障害者支援法」が施行され、平成28年に改定されたことで、発達障害に対する認識が医療や学校、福祉関係者の間で広まっていき発達障害に関する研修も数多く開催されている。近年は、書籍やウェブサイトでの情報も多くなっており社会的な認識や療育への関心が高まっているものと思われる。また、子どもを取り巻く環境の変化に伴い、養育の難しさや不安から発達障害児の利用ニーズが高まっているものと考えられる。

放課後等デイサービス事業は、民間企業の参入に伴い、サービス内容も多種多様化、発達障害児に対する、独自プログラムによる療育を導入し全国展開する企業も見られている。多様化するニーズに応じて事業所が増えることはよいとだと感じるが、わんぱくを継続させていくためにも自分たちが大事にしていることを改めて確認し、発信していくことの必要性を感じている。

わんぱくは、子どもたちにとっての放課後という視点を大事に、安心して自分を出せる場所で、友達や職員との関わりを楽しみながら好きな事を見つけていける場所でありたい。「おもしろそうだな…」、「やってみよう！」と行動を起こすためには、ありのままの自分を受け入れてくれる環境が大事だと感じる。

発達障害児の受け入れが増えた事で「自分の気持ちを伝えられるようになりたい」「嫌な時は、拒否を言葉で伝えてほしい」などコミュニケーションに関するニーズが本人や家族から多数挙げられている。そこで今回は、コミュニケーションの発達や小集団活動の中でのコミュニケーション支援について考えていきたいと思う。

2.自閉症児の特性理解

<定義>

自閉症児の支援をすすめるうえで、まず理解しておかなければならないのが自閉症の特性である。自閉症は、先天的に脳機能障害であり行動にも影響が見られる。支援者はその違いを尊重し、特性に応じて支援していくことが重要である。

自閉症に関する様々な臨床研究が行われている中で、これまでは、広汎性発達障害（PDD）、自閉症、アスペルガー症候群などいろいろな名称で呼ばれていたが、2013年のアメリカ精神医学会（APA）の診断基準 DSM-5 の発表以降、「ASD（自閉症スペクトラム）」に統一され国際的な基準で用いられている。

<特性>

- ① 社会性の質の違い
- ② コミュニケーションの質の違い
- ③ 想像思考、興味関心の偏り

*DSM-5 では、①と②が一つにまとめられている。

また、感覚刺激への反応に偏りがあることが多く、聴覚、視覚、味覚、臭覚、触覚、痛覚、体内感覚などすべての感覚領域で敏感さや鈍感さを併せ持ちやすい。

ここで理解しなければならないのは、「質の違い」という表現、「できない」のではなく、定型発達の人と違いがあるという視点である。自閉症はスペクトラムで連続したさまざまな色合いの特性をもっているという考え方である。

3.小集団活動のなかでの個

わんぱくでは、一人ひとりが好きな遊びを見つけていく自由遊びの時間と小集団での活動の時間を毎回設定している。安心して活動に参加していくためには、一人ひとりの発達段階を適切に把握して個別支援を実施していくことが大事だと思う。

状態を適切に把握していくために、わんぱくでは、利用開始の前にアセスメントを行い個別計画の立案や活動を組み立てを行っているが、その後は、個別日誌の中に活動の様子を記入していきアセスメントシートが活用されていないのが現状である。

今回は、Aさんの今年度のニーズとして挙げられたコミュニケーションについて「個人情報シート」と「発達障害特性シート」（水野、2015）でアセスメントを行いそこから支援を考えていきたい。

<事例>Aさん

小学校特別支援学級3年生、女兒、自閉症、わんぱくを週2回利用。

日常生活面は、着脱、排泄、食事など細かい点での支援は必要であるが、ほぼ自立している。

行動面は、とても身軽でトランポリンや公園が大好き。お絵描きやクッキングの活動が好き。

コミュニケーション面は、意思交換の困難さが見られる。

<コミュニケーションに関するニーズ>

家では、自分の主張を言葉で強く訴える場面やはっきり判断できる場面が増えてきていると感じる。家以外の場面でも自分の思いを少しずつ言葉で表現していきたい。

<個人情報シート>わんぱくでのコミュニケーションの状態

	Aさんのコミュニケーションに関する情報
本人が好んで使っている形態は？ (どんなコミュニケーションシステムを持っているか)	実際に使う具体物。言語。 予定表は文字や写真、絵を見て確認する様子が見られるが、コミュニケーションカードへの関心は低い。
どんな機能の表出が多いか？	あいさつ。 ご機嫌な時は、歌いながらダンスを楽しむ姿が見られる。 ほしい物は棚に駆け上がって自分で取ったり、クレーンでの要求も見られる。 良好な時は、好きな物やほしい物を選び言語で要求できる。 自分の思い通りにならない時は「キャー」と大きな声で拒否する。 不安定な時は、聴覚過敏が高まり耳をふさぎ拒否反応が強くなる。
どんな場面で表出することが多いか？	自由遊びの中で、絵本や図鑑を見ている時、ままごと、鼻歌、英語パズル、お絵描き遊びの場面。 おやつ、お弁当を食べる場面。
誰に対してコミュニケーションを取ることが多いか？	関わっている人。

＜発達障害特性シート＞

特 性		Aさんの行動や特性	支援の概要
コミュニケーション・社会性の特性	受容コミュニケーションの特性	本人が経験したことのある具体物に対して言語でのメッセージや情報を理解することができる。 視覚優位。声かけに無反応、回避するような様子が見られることもある。情報が理解できないことによる混乱や不安も見られる。	具体物や写真、絵など本人が理解できる視覚的情報を提示していく。 たくさんの情報を一度に伝えないようにする。
	表出コミュニケーションの特性	具体物を言語で表現して伝える。 英語パズルや物を見て英語で発生する。 不安定な時は大きな声や持っている物を投げて拒否する。	行動面を観察して、どんな場面での表出が多いのかアセスメントを行っていき場を設定していく。
	社会性・対人関係の特性	自分から職員に関りを求めることができる。 周囲の人を意識する場面が見られるようになってきたが、一人で遊ぶことも多い。 人と興味を共有することが難しい様子も見られる。	好きな活動に参加し友達や職員と一緒に、快の気持ちや楽しみを共有していけるような情動的共有遊びを設定していく。

「個人情報シート」と「発達障害特性シート」でアセスメントを行い、

- ① 本人のコミュニケーションの状態を客観的に捉えていく。
- ② 一人ひとりの特性との相互作用に着目して、なぜそのような行動が起きているのか行動の理由や背景を考えてみる。
- ③ 本人の強みや好みを活用して具体的な支援の方法を検討していく。

アセスメントより経験の積み重ねから理解言語は高い様子が見られたが、表出言語は好きな事を行っている時が中心で、嫌なことや思い通りにならない場面では「キャー」と大きな声で拒否する姿が見られた。具体物や予定表を提示しながらの声かけに対しては、言葉や指差しで自分の気持ちを表現できる時と無反応でやり過ぎたり拒否感を「キャー」の声の大きさに表現している様子も見られた。このことから、その時の状態や職員の関りがコミュニケーション面に大きく影響していると考えられる。

言葉での表現力を高めていくことで、コミュニケーションがスムーズになり、Aさんの気持ちや情緒も安定していき活動をより楽しめるようになっていくと感じる。その為には、Aさんが自分の気持ちを相手に伝えたいと思えることが大事で、自分の気持ちを表現できる活動場面や関係性を構築していくことが必要だと考えられる。これらのことを踏まえて、わんぱくで取り組んでいる事例を二つ紹介したい。

活動事例①【歌&ダンス】

好きな歌を口ずさみながらダンスを踊る姿が見られることもあり、歌やダンスは、Aさんにとって好きな事のひとつであることが推察される。他の子どもたちも歌やダンスは好きな子が多いため、プロジェクター使用して映像と音楽を用いた「歌&ダンス」の活動として取り入れている。小集団活動を行う中で、ここ最近では、「虹」や「HIMAWARI HAPPY」の歌とダンスを活動のはじめにみんなで行い、その後、それぞれが好きな曲を選曲して順番に入れていく流れで活動を進めている。

Aさんにとって苦手な音や曲が入る場面もあり、耳を手で強く押さえる姿や自分の順番に選曲できない様子が見られることもあった。不安な時や気持ちの波が大きいときは、聴覚過敏が高まっている状態なので、本人の気持ちに寄り添い、その場を離れることができるように支援している。曲選びでは、Aさん

が普段描いている絵や鼻歌を手がかりに選択肢を口頭や画像を用いて提示していき、好きな曲を確認しながら自己選択の支援を進めていった。

活動を重ねていくうちに経験から活動の流れを把握していき、Aさんの好きな歌を友達が選曲するような場面では、笑顔が多く見られるようになった。活動への期待が次第に高まっていき、Aさんの順番に「何がいいかな？おもちゃのチャチャチャ？しまじろうかな？」と声をかけると「アンパンマン！」と自分の気持ちを言葉で伝える姿が見られるようになり、スクリーンに映し出された映像も自分で選び積極的に楽しめる活動になってきている。

活動事例①から見えてきたこと

聴覚過敏が見られることもあるが、本人の気持ちを受け止める支援者がいることや友達の存在を側で感じることで、「歌&ダンス」の活動を通して、Aさんのやりたい気持ちを引き出していけたと感じる。順番に曲を選んでいく場面を設定したことで、自分の気持ちを出すきっかけとなり、気持ちを表現していく中で「伝わった！」という喜びが活動への参加意欲や言葉で表現する力を育てていると感じる。

活動事例②【おやつ】

おやつは大好きで、学校の帰り道に「おやつ♪」と口にするほどわんぱくに来るモチベーションのひとつとなっている。活動を終えた後でおやつの時間となるが、おやつの声かけをするとさっと片付けに入り、イスに座って待つAさん。個包装のおやつをお皿に全部出して、ウキウキの様子で眺めてから食べ始める姿が見られる。その日は、ベビースターラーメンやチョコレートをお皿に出して食べ始めていた。一緒に食べていた子が、職員に「スプーン下さい！」と伝えて、ベビースターラーメンをスプーンですくっておいしそうに食べる姿が見られていた。静かにおやつを口にしていたAさんだったが、職員の顔をじっと見て、勢いよく手を伸し「スプーン！」と精一杯の声でほしい物を伝えてくる姿が見られた。Aさんはスプーンを受け取り、満面の笑顔でおやつを食べることができた。

その後も、おやつの時間が楽しい時間になっていることから、ご機嫌な様子で隣に座っている同年代のBさんの顔に自分の顔を近づけたり、Bさんの鼻に手を伸ばして一瞬触れてみたり、Bさんへの関心が表出する場面も見られている。

活動事例②から見えてきたこと

おやつの時間は、好きなものを食べる幸福感から気持ちも和らぎ、おやつだけではなく友達に対しても興味湧いていることが分かる。おやつを食べる友達の様子を見て、真似をしたい気持ちが高まり、それを言葉で伝えたことで得られた達成感は、これから自分の気持ちを表現していく力になると思う。

また、おやつの時間は、気持ちが満たされ、相互に快の状態であることが多く、自分から「お友達に近づきたい！」という気持ちが高まり、友達との間でも新たな関りが広がっていくと考えられる。

4.考察

コミュニケーションに関して調べていると「三項関係」という言葉が出てくる。前言語的コミュニケーション行動に視点を当てた研究では、子どもは、人を介して物と交わり、物を介して人と交わっていく、他者と対象物を共有していく三項関係（自分－物－他者）の形成は、言葉の獲得の基礎であると考えられている。

<子どもの発達と関わり方の変化>

- 自分と環境の境界が曖昧で混沌としている状態
大人（養育者）と自分と一体的なもの、自己と重なり合ったものとしてとらえている段階
↓
- （自分—物）または（自分—他者）の閉じられた関係
「二項関係」
↓
- （自分—物—他者）の三者の関係
「三項関係」他者と対象物を共有する。「共同注意」人と物をかわるがわる見て、その人と一緒に対象物に目を向ける。

「言語発達」（小山、2018）より、言語学習とその足場作りにおいて、自閉症児は、物との関係と他者との関係の統合に比較的時間を要することが多い。共同注意や共同活動の基盤が十分形成されないまま、対物活動のレベルが高くなりすぎて、対人、社会的な刺激が受け止めにくなっていると考えられる。他者との「相互の快」を基盤に、子どもの発達の特徴をよくとらえ、最適期を探しながら、療育では、今、子どもの心が物に向かっているのか、人に向かっているのかを療育者がとらえていく試みの中で、子どもから他者への自発的な働きかけを引き出していくことが大事だと記載されている。

Aさんにとって、自分と好きな物との二項関係での遊びは、安心して楽しむことができ、気持ちのよりどころになっている様子だった。しかし、様々な経験を通して、現在は、他者との自発的な関りが見えはじめています。気持ち良く活動できる場面で、他者との関りが生まれ、伝えたい気持ちが高まってくことで三項関係が成立していくと考えられる。このような関りは、安心できる小集団の中で、一緒に活動する仲間がいるからこそ促進されていると感じる。子どもたちの活動時間から見ると、わんぱくで過ごす時間は、わずかな時間だが一人ひとりが好きな事を見つけていき、仲間と共に楽しめる力の育ちを大事に活動していきたい。

今後の課題としては、拒否感を「キヤー」と伝える時は、気持ちが安定しない時や活動場面の切り替えが難しい時に多く見られている。Aさんの強みである、好きな事に対しての素晴らしい集中力を大事にしながら、好きな事から少しずつ興味の幅を広げていき、期待をもって活動に参加していけるように具体的な支援を考えていきたい。

今回の実践発表を通して、コミュニケーションに焦点を当てたアセスメントを行うことで、Aさんの具体的なコミュニケーションの状態を把握していくことができ、支援の手がかりを見つけることができた。今後も一人ひとりが自分の気持ちを伝え、力を発揮していけるように、職員間で様々な意見を出し合い、一丸となって活動支援に取り組んでいきたい。

参考文献

- 水野敦之「フレームワークを活用した自閉症支援」エンパワメント研究所（2015）
- 小山正「言語発達」ナカニシヤ出版（2018）